

ウイルソン病の成人期の課題に関する研究

分担研究者： 清水 教一 （東邦大学医学部小児科学講座（大橋）教授）

研究要旨

東邦大学医療センター大橋病院小児科に通院している成人期ウイルソン病症例 116 症例に対し、他科受診に関する情報を検討した。受診が多いのは消化器内科，精神科，そして整形外科であり，受診契機は診療科ごとに異なった。成人期の本症症例に対しては，消化器内科や精神科などとの十分な連携が必要と考えられた。

研究協力者

星野廣樹（東邦大学医学部小児科学講座（佐倉）助教）
宇都宮真司（東邦大学医学部小児科学講座（大橋）シニアレジデント）
林歩実（東邦大学大学院医学研究科大学院生）
服部美来（東邦大学医学部小児科学講座（大橋）レジデント）

A. 研究目的

先天性銅代謝異常症の代表的疾患であるウイルソン病は治療可能な数少ない先天代謝異常症のひとつである。小児期に発症し診断されることが多いが，治療によりほとんどの症例が成人となることが出来る。本研究は，成人期に達した本症症例に対する医療の課題を明らかにするため，当科に通院中の成人期患者における他科受診の状況についての検討を行った。

B. 研究方法

東邦大学医療センター大橋病院小児科に通院歴のあるウイルソン病患者152症例のうち，20歳以上の116症例（76%）を対象とした。これらの症例の他科受診に関する診療情報を後方視的に検討した。

（倫理面への配慮）

本研究は東邦大学医療センター大橋病院倫理審査委員会の承認を得ている（H20049）。

C. 研究結果

・ 成人期ウイルソン病症例において，20歳代では41%，30歳代は65%，40歳代は80%，そして50歳代以上では全例小児科以外の診療科を受診していた。成人期症例が受診する診療科は多岐にわたっていたが，消化器内科，精神科ならびに整形外科を受診していた症例が比較的多くみられた。受診契機の特徴は診療科ごとに異なっていた。ウイルソン病の状態評価のために施行した画像検査から偶発的に悪性腫瘍等が発見され，消化器内科等を受診した症例もみられた。また高度医療機関でなくとも診断や治療が可能な疾患を大橋病院で診療している症例が比較的多く存在していた。

D. 考察

小児期に発症する慢性疾患のうち，成人でも診療する機会の多い疾患は成人の診療科へ移行することが一般的である。一方で先天代謝異常症のように小児科特有の疾患に関しては小児科が継続して関与することが多い。加齢に伴い出現頻度が増加する疾患に関しては，小児科医がコーディネーターとしての役割を担わざるを得ないと考えられた。その点では大学病院において成人期症例の診療を行うことは，一つの病院で患者の全身を管理できるという利点があると考えられた。

E. 結論

成人期のウイルソン病症例に対する診療に際しては、消化器内科や精神科などと十分な連携を取っていくことが重要であると考えられた。

F. 研究発表

1. 論文発表

清水教一：Wilson 病. 小児科 61: 1410-1414, 2020

清水教一：肝胆疾患 Wilson 病. 小児科臨床 73: 767-771, 2020

2. 学会発表

林歩実：成人期における Wilson 病医療の課題に関する検討. 第 5 回東邦小児医療研究会, 東京. 2020. 12

G. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む。)

1. 特許取得

特になし

2. 実用新案登録

特になし

3. その他

特になし